

□海外文献紹介□

食道静脈瘤出血に対する内視鏡
的硬化療法：その効果と合併症

Endoscopic sclerotherapy for
bleeding esophageal varices: ef-
fects and complications: *SJ Ayres,*
JS Goff, GH Warren (Ann Intern
Med 98: 900-903, 1983)

最近、食道静脈瘤出血に対する内
視鏡的硬化療法が注目されている。
硬化療法では硬化剤により血管内皮
の損傷を生じ、食道静脈血栓ができ
ると考えられていたが、病理学的な
証明はなかった。われわれは硬化療
法後の剖検例で硬化剤注入後の病理
学的変化とその合併症について検討
した。

1978～1982年の間に食道静脈瘤出

血に対し硬化療法を行った55症例
中15例が死亡、10例を剖検した。
一般に患者はChild分類C群で約半
数では他の止血法が無効であった。
硬化療法は硬性鏡もしくはファイバ
ースコープを用い、1～3本の静脈
瘤にそれぞれ5% sodium morrh-
uate 1～2 ml を食道胃接合部の近
くから注入し施行した。

10例を2群に分けると治療後30
日以内に死亡した急性反応群が7
例、治療開始後60日以上経て死亡
した慢性反応群が6例あり、3例は
両群に該当した。病理学的には急性
反応では静脈瘤内の血栓、食道壁の
潰瘍および急性炎症反応を認め、慢
性反応では肉芽組織が膠原線維化
し、慢性炎症性細胞浸潤が消退しつ

つある。一方、硬化療法の合併症が
死因となったものは3例で、潰瘍か
らの出血が2例、穿孔潰瘍に伴う縦
隔炎・膿胸が1例であった。

硬化療法後の組織学的変化を記載
した最近の報告とわれわれの結果は
合致し、硬化療法は単に血栓だけか
ら成るものではなく、静脈を含む食
道壁の壊死とその線維化による修復
から成るものであることを示した。
また、合併症として種々の潰瘍、出
血、細菌性静脈炎、食道膿瘍、穿
孔、膿胸、縦隔炎、線維性狭窄を認
めた。硬化療法を安全かつ有効に行
うには更に十分な研究が必要であ
る。

(関東通信病院消化器内科

伊藤慎芳 抄)